子どもの遊びに供される地域空間に関する研究

佐藤 丘*
中村 攻*

Study on the space for children's play in a school district.

Takashi SATO
Osamu NAKAMURA

摘要：子どもの遊びの発展のためには、遊び場性の高い地区中心的施設の充実とともに、地域全体を遊び場の視点から体系化していく必要がある。そこで、本研究は子どもの戸外遊びの一般的特徴を概観した上で、子どもの遊びに供される8種類の代表的な地域空間とそこで展開される戸外遊びを検討することにより、子どもの遊びに供される地域空間の遊び機能からみた特性を明らかにした。

1. はじめに

子どもの遊びが成立する条件として、「遊び時間」、「遊び集団」、「遊び空間」、「遊び技術」があげられるが、今日これらの条件は十分満足できるものではなくてきている。¹⁾「塾、クラブ活動が忙しい」、「遊び友だちがいない」、「遊び場所がない」などの理由で地域で遊ばない子どもが増加している。

こうした状況の中で、造園家はおもに「遊び空間」の側面から子どもの生活の発展に関わってきた。そして、この分野で多くの研究成果の蓄積がなされてきた。

造園分野におけるこれらの研究成果は、大きく2つの系統に分けることができる。

1つは、子どもの遊び専用空間である児童公園に代表される施設計画としての研究であり、もう1つは、子どもの遊びの空間的非限定性に着目して、子どもの遊び場を考える地域計画としての研究である。

前者の研究は、地区中心的施設（プレイロット、児童遊園、児童公園など）で充足しえる一定のスタイルの遊びに対応する空間の創造において重要なものである。

しかし、地域の遊び場が全体量として、激減している現在、遊び場性の高い地区中心的施設とともに遊び以外の利用を持つその他の地域空間をもとりあげて、地域全体を子どもの遊び場という視点から体系化していくことが求められてきているといえよう。

本研究は、こうした問題意識に立って進めたものである。²⁾

2. 目的・対象地域ならびに調査方法

本研究は、次の点について明らかにしようとするものである。

第1は、子どもの戸外遊びの今日の特徴を概観することである。

そのうえで、第2に子どもの戸外遊びに供される代表的な地域空間をとりあげ、その地域空間と戸外遊び生活との相互関係を検討し、遊び機能からみたこれらの遊び空間の特性を明らかにすることである。

対象地域は、千葉県松戸市C小学校区に求めた。C小学校区は常盤線松戸駅と江戸川にはさまれた住商混合地域である。公共的遊び空間は、児童公園（4ヶ所）と江戸川河川敷である。

調査方法は、C小学校1,4,6年児童を対象にアンケート調査を実施した（S59.5）。回収状況は表-1に示す。（子どもの遊びを年間を通して把握するため、季節毎に（1）よくする遊び3種類（2）その場所（3）その場所

表-1 アンケートの回収

		総数	回収	有効数	%
1年	男子	41人	41人	36人	87.8
	女子	42人	42人	34人	80.9
4年	男子	41人	39人	35人	85.4
	女子	40人	39人	33人	82.5
6年	男子	37人	37人	34人	91.9
	女子	38人	36人	34人	89.5
計		236人	234人	206人	86.2

表-2 各学年男女の戸外遊び件数

	1年	4年	6年
男子	266件	267件	186件
女子	246件	226件	154件

*千葉大学園芸学部

表ー3 各学年男女、季節別の戸外遊び

	1番件数の多い遊び	2番目の遊び	3番目の遊び
春	サッカー (55.6)	自転車のり (44.7)	鬼、ボール (22.2)
夏	虫とり (69.4)	水泳 (50.0)	自転車のり (38.9)
秋	サッカー (44.4)	自転車のり (36.1)	野球 (33.3)
冬	自転車のり (38.9)	サッカー、なわとび (25.0)	
春	サッカー (68.6)	自転車のり (48.6)	野球 (42.9)
夏	水泳 (54.3)	虫とり (51.4)	サッカー (40.0)
秋	サッカー (54.3)	自転車のり (40.0)	野球 (34.3)
冬	サッカー、なわとび (28.6)		
春	自転車のり (55.9)	サッカー (32.4)	野球 (20.6)
夏	水泳 (79.4)	虫とり (44.1)	自転車のり (35.3)
秋	自転車のり (47.1)	サッカー (23.5)	野球 (20.6)
冬	雪あそび (50.0)	自転車のり (26.5)	
春	自転車のり (73.5)	ままごと (35.3)	ドッチボール (32.4)
夏	自転車のり (52.9)	水泳 (47.1)	虫とり (41.2)
秋	自転車のり (52.9)	なわとび (32.4)	鬼ごっこ (26.5)
冬	自転車のり (32.4)		
春	バトミントン (33.3)	自転車のり (27.3)	
夏	水泳 (78.7)	虫とり (48.5)	
秋	鬼ごっこ (33.3)	バトミントン、なわとび (30.3)	
冬	なわとび (57.6)	雪あそび (21.2)	
春	自転車のり (29.4)	ドッチボール (23.5)	
夏	水泳 (88.2)		
秋	自転車のり、ローラースケート (20.6)		
冬	雪あそび (32.4)	なわとび (20.6)	

()内は、遊び率を示す。遊び率=遊び件数/各学年男女有効数・100
但し、遊び率20%以下の遊びは削除した。

を選ぶ理由 (4)その場所の地図への記入を項目としておこなった)。本研究では、このアンケートから戸外遊びについて検討した。

3. 戸外遊びの今日的特徴

各学年毎に、戸外遊び件数を示したものが表ー2であり、各学年毎、季節別に頻度の高い戸外遊び3種を示したものが表ー3である。

戸外遊びにみられる特徴は次の2点である。

(1) 戸外遊び件数の減少

戸外遊び件数をみると、男子は4年が1番多く、次いで1年で、6年になると極端に減少している。

女子は1年、4年、6年の順に戸外遊び件数が減少する。

小学生の低学年では男女共に戸外遊びが多くみられるが、中学年になるほど性差がはっきりとあらわれる。男子の場合は、戸外遊びが最も盛んな年令期を迎える子が、女子の場合は、低学年と大差なく若干減少する。高学年になると、男女共、戸外遊びは大幅に減少する。

(2) 戸外遊びの通年化

男子は、戸外遊びの種類の学年変化はあまりみられず、年令による大きな変化はしていない。

各学年を通して、夏を除く各季節はボール遊び、自転車のりがおもで、残りが鬼ごっこ、なわとびとなっている。

夏は各学年とも、水泳、虫とりそして自転車のり、ボール遊びとなり、春、夏、秋の遊びに水泳、虫とりを加えた形となっている。

即ち、季節変化は夏においてのみ特徴的であるが、他の季節では変化が乏しく同様なものとなっている。

女子は男子に比べ学年変化がみられる。高学年になるにしたがい、鬼ごっこ、ままごとがなくなり、ローラースケート、バトミントンなどがおこなわれる。

夏を除く季節は、1年では自転車のり、なわとび、鬼ごっこ、4年では自転車のり、バトミントン、なわとび、鬼ごっこなど、6年では自転車のり、ローラースケート、なわとびなどとなっている。女子も夏においてのみ季節変化がみられるが、他の季節では変化の乏しいものになっている。³⁾

4. 戸外遊びと地域空間

次に、子どもの戸外遊びによる地域空間の使われ方を、遊び内容と遊び空間との相互関係によってみる。戸外遊びの分類は表ー4、相互関係は表ー5、図ー1に示す。代表的な地域空間8種類について述べる。⁴⁾

(1) 公園

公園は、各学年で代表的な遊び空間となっている。

1 男子

- ・1年が多様な遊びをしているのに対し、4年、6年は片寄りがみられる。
 - ・「ボール遊び」(分類記号D型・以下記号のみを記す)が各学年とも主要な遊びとなっており、特に4年でこの遊びへの特化が激しい。
 - ・「自転車のり」(E)が低学年でみられ、高学年では減少している。
 - ・「虫とり」(C)が各学年とも夏におこなわれている。
- ##### 2 女子
- ・「ボール遊び」(D)、「自転車のり」(E)が各学年とも多くなっている。
 - ・男子と同様に「虫とり」(C)が各学年通して夏におこなわれている。
 - ・男子に比べ、「ブランコ」(B)、「なわとび」(F)、「鬼ごっこ」(H)がおこなわれるなど利用形態が多様である。

公園は子どもの代表的な遊び空間になっているが、性差や年令差によって、その係わり方は変化する。男子では「ボール遊び」や「自転車のり」などの比較的広い空間を必要とする遊びがおこなわれるが、高学年になるとこれらの利用も大きく後退する。これは、既述のように高学年になると戸外遊びそのものが減少することにもよるが、その他に公園がこれらの遊び空間として対応できなくなり、より条件にかなった空間(河川、校庭など)へ移動していくことにもよる。(「河川」「校庭」の項を参照)。女子では、男子ほどの遊びの片寄りはみられず多様な遊びが展開されている。また、男女共に夏の「虫とり」など自然的遊びの中心的空間の1つになっていることも注目される。

(2) 道路

道路は、男女共に比較的低学年に多く遊ばれている。

1 男子

表-4 戸外遊びの分類

戸外遊びの分類					記号	
戸外遊び	遊び道具を 使用する遊び	遊戯施設を おもに使用する遊び	自然物を対象とする遊び……………	砂遊び etc	A	
			自然物を対象としない遊び……………	ブランコ etc	B	
		遊戯施設を 使用しない遊び	自然物を対象とする遊び……………	虫とり、土手すべり etc	C	
			自然物を対象としない遊び……………			
		遊び道具を使用しない遊び		球技……………	サッカー、野球、バドミントン etc	D
				乗りもの……………	自転車、ローラースケート etc	E
				その他……………	なわとび、ゴムとび etc	F
		自然物を対象とする遊び……………	木のぼり、花つみ、賀あそび etc	G		
		自然物を対象としない遊び……………	鬼ごっこ、水泳 etc	H		

「記号」は、表-5 及び 図-1に使用する。

表-5 各地域空間の季節別戸外遊び件数

	1年男子	4年男子	6年男子
春			
夏			
秋			
冬			
	1年女子	4年女子	6年女子
春			
夏			
秋			
冬			

戸外遊び件数: □→(0件)、◻→(1~4件)、◼→(5~9件)、◽→(10~19件)
 ●→(20~29件)、⬤→(30件~)
 遊び空間 : 公→公園、道→道路、庭→庭・社宅庭、河→河川、空→空地、社→社寺、
 校→校庭、駐→駐車場、他→その他

・「自転車のり」(E)が各学年とも多い。

・1年はこの他に「ボール遊び」(D)も多い。

2 女子

・「ボール遊び」(D),「自転車のり」(E)が各学年とも多い。

・「なわとび」(F),「鬼ごっこ」(H)が低学年でみられるが高学年では減少してしまう。

道路は男子高学年には、「自転車のり」の空間として、そして、女子、男子低学年にはこれに加え、「ボール遊び」,「なわとび」,「鬼ごっこ」などの多面的な遊び空間として使われている。

女子、男子低学年は、活動量が少ないため男子高学年ほど広い空間を必要とせず、自宅に隣接する身近な道路で遊ぶ傾向があるといえよう。

(3) 庭・社宅庭

庭・社宅庭での戸外遊び件数は低学年に多く、高学年には少ない。

1 男子

・「ボール遊び」(D),夏の「水遊び」(G)が1年でおこなわれている。

・4年には「なわとび」(D),6年には冬に「雪遊び」(G)で使われる程度でその他の利用はされていない。

2 女子

・1年には「なわとび」(F),そして、冬を除く季節で「ブランコ」(B),「虫とり」(C),「ボール遊び」(D),「自転車のり」(E),「花つみ」(G),「鬼ごっこ」(H)など多様な

図-1 地域空間別の各学年男女の戸外遊び件数

遊び空間となっている。

- ・4年には「ボール遊び」(D),「なわとび」(F)に使われている。
- ・6年には「花つみ」(G),「鬼ごっこ」(H)に使われている。

庭・社宅庭は、男女低学年に多く使われている。男子低学年は、「ボール遊び」を中心にした利用であり、女子低学年は、多様な遊び空間として利用している。

(4) 河川

河川は、春夏に多く遊ばれ、空間利用に季節的变化がある。この点で他の遊び空間と異なり特徴的である。さらに、男女共高学年ほど戸外遊び件数が多く、学年が下がるにしたがい減少する傾向にあることも特徴的である。

1 男子

- ・「魚つり、虫とり、土手すべり」(C)など自然的な遊びが各学年ともに多くなっており、高学年ほど増加する。
- ・これに加え、「ボール遊び」(D),「自転車のり」(E)がされている。

2 女子

- ・1年の利用は少ない。4年、6年は「草つみ、花つみ」(G)など自然的な遊びが多く占めている。

河川は、自然度の高い空間であり、親水機能を備えた貴重な空間である。しかし、堤防が高く、河川敷への見

通しがきかないため危険空間となってしまう低学年は利用しずらくなってしまう。

河川は高学年により、夏を中心にした「虫とり」、「草つみ」など自然的な遊び、そして堤防上での「自転車のり」、さらに、河川敷での「ボール遊び」と多様な遊びがされる空間である。

(5) 空地

空地は、C小学校区北部に存在する区画整理後の未建の敷地(約30坪～100坪)に代表される。したがって、公園のような整備、管理はされていない。

1 男子

- ・1年、6年には、「ボール遊び」(D),「自転車のり」(E)がされている。

2 女子

- ・1年には、戸外遊び件数は少ないが多様な使われ方をしている。

空地は、低学年を中心として「ボール遊び」、「自転車のり」の空間となっている。

(6) 社寺

学区内には、数ヶ所の社寺がある。各学年とも、主に低学年を中心にして男子が利用している。

1 男子

- ・「虫とり」(C)が各学年とも夏に遊ばれている。
- ・低学年では、これに加え「ボール遊び」(D),「自

転車のり」(E)もされている。

2 女子

- ・低学年に「ボール遊び」(D)、自転車のり(E)の空間として若干使われているが利用度は低い。

社寺は、地域の遊び空間の中で比較的自然度が高く、「虫とり」、「木のぼり」などの自然的な遊びのできる空間である。

低学年は戸外遊び件数で高学年を上回っているが、高学年の「公園」での「ボール遊び」を社寺でおこなっているため戸外遊び件数が上回るのもあって、樹木など自然物を対象とした遊びに関しては、高学年になるほど増加していくのである。社寺の樹木などは、地域空間の中で重要な自然遊びの機能を果しているといえる。

(7) 校庭

校庭は、高学年が中心で低学年には使われておらず、戸外遊び件数も少ない。

1 男子

- ・6年に「ボール遊び」(D)で使われている。

2 女子

- ・4年に「ブランコ、鉄棒」(B)で使われている。

放課後、校庭はクラブ活動で使用するため、はやく下校する低学年には使われない。しかし、高学年になると「公園」の広さに飽き足らない子どもたちの「ボール遊び」の空間として貴重なものとなっている。

(8) 駐車場

学区内には多くの駐車場がある。しかし、それは車10台程度の狭い面積のものであり、戸外遊び件数は他の地域空間と比較し少なく、低学年を中心としており高学年には利用されていない。

男女とも、道路の使われ方と同様に「ボール遊び」、「自転車のり」、「なわとび」などがされ、身近な遊び空間としての利用が主なものである。

5. まとめ

本研究は、子どもの戸外遊びの一般的特徴を概観したうえで、戸外遊びに供される代表的な地域空間とその空間の遊び機能からみた特性を明らかにした。調査結果とそれをふまえた若干の計画的提言をまとめると次のようになる。

(1) 調査結果

公園は、これらが戸外遊びの専用空間として設けられているところから、最も中心的な遊び空間となっている。しかし、高学年になると、こうした公園の遊び場としての中心性は急激に低下する。これは、年令差や性差からくる子どもの戸外遊びの多様性(子どもの遊びには年令や性によって階層性があるといえる)に公園が十分に應えることができない状況を示すものである。

道路は、自宅に連続する最も身近な戸外遊び空間とし

て遊び場性の高い地域空間である。特に、比較的活動量の少ない女子や男子低学年の遊び場としての利用が高い。

庭・社宅庭は、男女共に低学年の代表的な戸外遊びの空間である。この年令までの子どもは親の監視のもとで遊ぶことが多いことから、子どもが最初に戸外遊びを体験していく空間として、この種の空間の遊び場としての機能は重要である。

河川は、自然的遊びに供される地域空間の代表的なものである。当該地域に存在する河川は河幅も広く、「魚つり」、「土手すべり」など自然を対象とした季節感のある遊びができる貴重な地域空間となっている。

空地は、私的所有を前提としており遊び場にしては一時的なものであるが、低学年の子どもを中心にした遊び場として利用される場合も少なくない。

社寺は、最近になってその駐車場等への営利空間化、遊びによる器物の破損による管理強化などにより、遊び場性が著しく弱めてきている地域空間の1つである。しかし、日常的・一般的な遊び場性は低下しても、夏を中心とした「虫とり」など自然的な遊びのできる数少ない地域空間として社寺の存在は大切なものとなっている。

校庭は、高学年男子を中心とした「広さ」を要求する戸外遊びに対応できる数少ない地域空間である。しかし、クラブ活動などの学校側の利用や校庭開放にみる一般社会人への利用などによって、校庭の遊び場性はそれほど期待できない状況にある。

駐車場は、自動車利用やその保管を中心としており、遊び場としての機能は大変低いものであるが、地域によって低学年男女の遊びを中心とした遊び場の1つになっている。

(2) 提言

子どもの戸外遊びに供される地域空間としては、多様な空間が存在し、それぞれに特徴的な遊び機能が対応している。地域における遊び場計画としては、対象地域の空間特性に応じ、こうした多様な空間の組合せを考えることによって確保していくことが必要である。

公園は、地域における唯一の戸外遊びの専用空間であり、戸外遊びの拠点空間としての機能が期待されるものであるが、現状の利用は、子どもの戸外遊びが年令差、性差などにより相当異なるところから、子どもの遊びの要求の発達に十分に應えるものになっていない。特に、高学年になると遊び場としての中心性が低下する。

男子も女子も、幼児も小学生の低学年も高学年も、これら全ての子どもの遊び場の要求を公園で満たすことができないのならば、公園にはどんな遊び場機能を持たせるべきか、また、残される機能をどんな地域空間で満たしていくべきかについて検討することこそ、子どもの遊び場計画の地域計画的課題であるといえる。

このことについて、今回の調査結果で示したところは、

過密な公園の遊び場機能の分解であり、非専用の地域
の遊び場の積極的な活用策の必要性である。

過密な公園の遊び場機能の分解とは、各年令の遊び場
要求に対応して過密になっている公園の機能を分解し、
公園は主に地域での貴重な広がりをもつ遊び場として活
用し、その他の機能（主に幼児などの遊び場機能）は公
園の外にもちだすのである。

非専用の地域遊び場の積極的な活用とは、道路や
空地、庭・社宅庭、駐車場、河川、校庭などの遊び場と
しての機能を、それぞれの空間の持っている専用の機能
との調整をすることによって確保していくことである。

道路や空地 庭・社宅庭、駐車場は身近な空間として
幼児や低学年の子どもの戸外遊びに対応する特徴を持つ。
公園から外されたこれらの年令層の遊び場としてこうし
た空間の遊び場性の確保が重要になってくる。

そのためには、道路（生活道路）では、自動車利用と
の調整が重要課題となってくる。空地では、この私的
空間に一定の継続性を確保していくための土地対策（こ
種の小空間を公園行政の対象として買い取っていくとか、
税優遇策での借地促進とか）が課題となってくる。庭・
社宅庭では、最近の宅地の狭小化の中で、コーポラティ
ブハウスなどにみる“共同庭”の発想などが重要になって
くるものと思われる。駐車場も、幼児・低学年を中心と
して補足的な遊び場機能を満たしているものであり、
時間的制約や遊び内容の制約を考えつつ、その利用が計
られる必要も生じてくるといえる。

こうした小空間の他に、地域には戸外遊びに供される
非専用の戸外空間が存在する。例えば、河川や社寺は、
地域に存在する自然的要素を多く残した空間であり、自
然的な遊びが展開される空間である。河川は水質の汚濁
や護岸の人工化が障害となっているし、社寺は、器物の
破損などの問題が存在する。子どもの貴重な自然的遊び
場としての視点から、こうした課題への対応が求められ
ているのである。

（尚、本研究は、松戸市の住商混合地域での1つのケ
ーススタディであり、今回の研究結果が普通性をもつも
のとなるためには、幾つかの地域で同様の研究が重ねら
れていくことが必要である。）

補注 参考文献

- 1) 一番ヶ瀬康子は子どもの遊びの成立条件として、「時
間」「集団」「空間」をあげているが、著者らはこれ
に「技術」を加えて遊びの成立条件としている。
中村攻（1984）：子どもの遊び場計画論：農村計画
論 354 - 374，農山漁村文化協会
- 2) S 40年以降の造園学会研究発表をみると、前者の研
究としては、
辰己修三他（1974）：子どもの遊び場空間の利用に
関する事例的研究：日本造園学会春季大会研究発表
要旨，6 - 7
養茂寿太郎（1975）：子どもの遊び場の構成に関す
る研究(1)(2)：日本造園学会秋季大会研究発表要旨，
47 - 51
などがあげられる。後者の研究としては、
宮崎元夫他（1968）：子どもの遊び場に関する研究
(1)(2)：日本造園学会春季大会研究発表要旨，30 - 33
宮崎元夫他（1968）：子どもの遊び場に関する研究
(3)：日本造園学会秋季大会研究発表要旨，
宮崎元夫他（1970）：子どもの遊び場に関する研究
(4)：日本造園学会春季大会研究発表要旨，103 - 104
宮崎元夫他（1970）：子どもの遊び場に関する研究
(5)：日本造園学会秋季大会研究発表要旨，41 - 42
福富久夫（1971）：農村地域における子どもの遊び
と遊び場：日本造園学会春季大会研究発表要旨，75
- 77
などがあげられる。
- 3) この年は例年になく大雪が降ったため、冬の遊びと
して「雪あそび」があげられているが、通常、降雪
はあまりみられず、「雪あそび」する程の積雪はほ
とんどみられない。
- 4) 表 - 5 における夏の「その他」の記号Hはおもにプ
ールでの「水泳」である。今回の研究ではプールは
水泳という単一の利用形態を持つ遊び専用空間であ
り、他の地域空間のような多様な遊び機能の矛盾は
内在していないと判断し、「その他」の項に分類し
特別とりあげて分析の対象とはしていない。

Summary : In this study, we observed two elements; (1) Children's outdoor play in a school district. (2) The relationship between children's outdoor play and typical spaces of such activities. (parks, roads, riversides, shrines and temples, etc.).

The results of the study showed that; (1) Children's tendency to play outdoor has been on the decline. (2) Children's outdoor play activity throughout the year is constant. (3) In regard to outdoor play spaces; parks don't provide enough spaces to satisfy the demand for various play activities, while other spaces such as roads and riversides have the potential to provide such spaces.